

論文

ベトナム戦争と文学

— 開高健と日野啓三 —

稲村 聡*

はじめに

本稿は開高健（1930－1989）および日野啓三（1929－2002）のベトナム取材にもとづくルポルタージュを考察する。

開高は週刊朝日特派員として、1964年11月、南ベトナムに派遣された⁽¹⁾。『ベトナム戦記』は1965年2月のベトナムからの帰国後、翌3月に出版された。これについて開高は、あとがきにおいて『週刊朝日』に連載したものを箱根に一週間こもって書きなおした⁽²⁾〔開高 1965-b: 169〕ものだという。開高自身が「誇りよりは羞恥の対象であるような仕事」〔開高 1974: 242〕と述べるほど、完成度には不満がのこるものだった。

日野は、読売新聞社特派員として1964年12月からベトナム取材をはじめ⁽³⁾、翌年6月に帰国した⁽⁴⁾。この間、読売新聞に記事を送りつけ、帰国後『ベトナム報道 特派員の証言』を発表する。その後もベトナム取材にもとづく作品を多く残したが、この中でも「悪夢の彼方」は、執筆した1966年には発表されず、後年1984年の『名づけられぬものの岸辺にて 日野啓三自薦短編集』に収録される。日野の自筆年譜中

には『中央公論』にベトナムのルポルタージュを依頼され執筆したが掲載されず、評論集『名づけられぬものの岸辺にて』に収録されたという。〔日野 2013: 333-334〕

このように『ベトナム戦記』は開高自身良い評価を下しておらず、また「悪夢の彼方」は執筆後20年近くを経てようやく日の目を見た作品である。だが、ベトナム帰国後から短期間で書かれたものとして、彼らのベトナムでの体験が作品として実を結ぶ過程をたどるには、考察する意義があるものといえる。二人のベトナム戦争に関する二作品を考察することによって、日本におけるベトナム戦争と文学との関連をあきらかにする⁽⁴⁾。

1 処刑の目撃

開高と日野は1965年1月29日早朝、南ベトナムのサイゴン（現ホー・チ・ミンシティ）において、南ベトナム解放民族戦線（以下解放戦線）のスパイとして南ベトナム政府に逮捕されたベトナム人青年レ・ヴァン・クエンの公開処刑を目撃している。二人に共通する体験の中でも印象的であり、本稿であつかう作品でも議論を呼んだ描写のひとつであろう。最初にこの場

* 早稲田大学大学院社会科学研究所 博士後期課程5年（指導教員 内藤 明）

面から見えてくるものは何かを検討していこう。

まず『ベトナム戦記』を見ていく。処刑された青年が銃撃されると、「銃音がとどろいたとき、私のなかの何かが粉碎された。膝がふるえ、熱い汗が全身を浸し、むかむかと吐気がこみあげた。たっていられなかったの、よろよろと歩いて足をたしかめた。」「開高 1965-b: 144] という。

ここでは、開高が公開処刑の目撃のあとに、従軍取材中に経験する解放戦線の銃撃の回想も挿入されている。従軍取材の際は「けれど私は鼻さきで目撃しながら、けっして汗もかかねば、吐気も起さなかった」[開高 1965-b: 144] という。戦闘後の死者を目撃しても、私は吐気を催さない。それは「兵。銃。密林。空。風。背後からおそう弾音。まわりではすべてのものがうごいていた。私は《見る》と同時に走らねばならなかった。体力と精神力はことごとく自分一人を防衛することに消費された」[開高 1965-b: 144] からだった。しかし、処刑の行なわれた広場では、「私は《見る》ことだけを強制された」[開高 1965-b: 145] という。

解放戦線によるテロなどの攻撃にさらされる可能性はあるものの、サイゴンで行われた処刑の現場においては自身を防衛する必要はないだろう。処刑の現場では、「私」は目撃者であることが許される。《見る》こと「だけ」を「強制」され、「だけ」と自身の行為を限定する。

戦闘中は、「戦闘の当事者」にならざるを得ない。戦場では、戦うもの、あるいは記者として取材するものであっても、攻撃対象になりえる。ゲリラ戦が展開されていた当時のベトナムの状況では、なおさらそうである。南ベトナム

政府軍や米兵、または解放戦線の兵士たちは応戦することができる。だが、武器をもたない開高たちは攻撃を避ける、つまり逃げるのが身を守る唯一の方法になる。両軍入り乱れる状態であったベトナムの戦場では、記者であっても自らの身は自分で防衛せざるを得ないだろう。戦闘中は、特に記者にとっては防衛する対象は自身でしかない。非戦闘員であれば他者を守ることは非常に困難をきわめるだろう。このような立場のちがいはあるが、戦闘の現場に居合わせた者はみな、生と死の境目に居合わせることになる。

だが公開処刑では、その場にいる処刑に関与していない者は当事者というより、目撃者である。処刑される者以外の目撃者たちは、解放戦線のテロに遭う可能性はあったとしても、その場で南の兵士に殺されることは当然ない。その処刑を目撃している者のひとりである「私」は、特派員という立場もあるが、見ている自身を意識することができる。見られる対象である処刑される少年がおり、見ている「私」自身がいる。処刑の現場では他者が意識され、戦闘中は他者さえ意識の外にあり、「私」自身を意識せざるをえないというちがいがあある。他者の死に関わっていることができないのが戦闘中である、ということになろうか。

処刑を目撃する「私」は、「第三者」と自身を表現する。

私は軍用トラックのかげに佇む安全な第三者であった。機械のごとく憲兵たちは並び、膝を折り、引金をひいて去った。子供は殺されねばならないようにして殺された。私は目撃者にすぎず、特権者であった。私を圧倒した説明しがたいなものかはこの儀式化された蛮行を佇んで《見る》よりほかない立場から生れたのだ。[開高 1965-b: 145]

「私」は「安全な第三者」であるという。軍隊を派遣することのなかった直接の当事国ではない日本人としてベトナムにいき、戦闘員として派兵されたのではなく、特派員としてベトナムを取材している。それは直接戦い、または何らかのかたちで直接紛争解決のためにベトナムと関わる者ではない。第三者という立場は、直接戦闘に関与した南北ベトナム、アメリカ、韓国、タイ等の出身でなければ自明であろう。

朝鮮戦争における特需ほどではないが、ベトナム戦争も日本経済にそれなりの好影響をもたらした。だが、他国の戦争によって経済的な“恩恵”を受けなくとも、自国の経済力で豊かになりつつあった当時の日本では、生産より消費によって国力が増大していくという状況にあったともいえる。

丸川哲史は、ベトナム戦争の時期は、高度経済成長期に差し掛かっており、戦後日本が変化した。その波を受けて成立しているのが『ベトナム戦記』だとする[丸川 2010: 16]。1960年代という戦後20年を経過した時代ゆえに書かれ、かつ読まれた作品と位置づけている。平和、経済的成長、発展が続く日本において、まさにそうした時代に書かれた作品であったということだ。しかしそれに加えて、実際の戦争や戦場からは遠ざかりはじめたものの、かつての戦争の記憶が完全に消えることなく、未だ身近なものとして戦争があった時代であった。

また矢崎彰は、世界中の戦争に対しても無関心ではいられないが、あらゆる戦争に直接関わることは不可能であり、この意味においてほとんどの人はこの「第三者」「見る」だけの立場に立たざるを得ないのではないか[矢崎 2002: 164] とする。そして、開高の立場とは、

「傍観者ではなく、「見る」ことによって当事者となる第三者なのではないか。」「[矢崎 2002: 164] と指摘する。

「平和な日本」から来た、非当事者ではない「私」がどの程度、ベトナムの現実に肉薄することができるか。そのために処刑を「見」て、「見る」自身の姿をそのまま書いた。開高は当事者ではないことを前提として、処刑を目撃したのだった。矢崎は「当事者となる第三者」とするが、それはまた、戦争を取材することによって「見る」ことができた記者としての開高の立場がより明白になる。

「見る」ことによって、「見たもの」「見たこと」にたいする当事者にはなれるだろう。しかしそれは、あくまで開高が「見た」ことにたいする当事者意識であり、開高は戦争の当事国の人間にはなれない。自分の見たことそのものの当事者意識はあるが、戦争の当事者とは決して言えないだろう。目撃し、見ている自分自身の姿をも描くことによる、現場の目撃者としての「第三者」性を明確に意識した、「開高から見たベトナム」であったといえる。

では、開高の「第三者」としての立場からの処刑の取材が、『ベトナム戦記』における表現にどのような影響を与えたのであろうか。「第三者」という立場、加えて戦争を見て、言葉で表現することについて、当時なされたこの作品にたいする批判を次章で考察していく。

2 《絶対の悪》⁽⁵⁾という現場—開高—

つぎに処刑の現場の光景を表現した箇所を検討する。青年は逮捕されていなければ、テロやジャングル戦によって必ずアメリカ兵かベトナム兵かを殺すだろうという。そして、

彼の信念を支持するかしないかで、彼は《英雄》にもなれば《殺人鬼》にもなる。それが《戦争》だ。しかし、この広場には、何かしら《絶対の悪》と呼んでもよいものがひしめいていた。[開高 1965-b: 144]

という。解放戦線側からの視点、南ベトナムおよびアメリカ側の視点を以上のように述べ、処刑の行われたサイゴンの広場の光景を《絶対の悪》と表現する。

この作品を検証するにあたりたびたび引用されるものが、1965年10月に発表された吉本隆明の批判である。吉本は「人間の思想（幻想）のほんとうの恐ろしさは、戦闘を体験しても第三者、書斎に寝ころんでいても第二者であるという思想と現実の事件（素材）との不関性のなかに根拠をおいている。」[吉本 1965: 87] という。つまり、思想と現実との不関性、思想と現実との関係が一对、一体ではないということである。吉本は、開高が「戦争も平和も不可能であり、不可避であり、戦争＝平和という同在性のあいだに懸垂された状態でしか、現在、世界が人間の存在をゆるしていないという情況」[吉本 1965: 87] から眼をそらしてベトナムへ出かけていった点を批判する。

ここでの吉本の論点は、

この作家が、二十年にわたる〈平和〉な戦後の有難い〈民主主義〉とやらの現実のなかで、政治的なまた大衆的な国家権力とのたたかいのなかで敗れ、思想的に死んでいったひとびとや、〈平穏〉な日常生活のなかで、子を生み、育て、一言の思想的な音もあげずに死んでゆくひとびとを、〈銃殺〉された死者として〈見る〉ことができず、わざわざベトナム戦の現地へ出かけて、ベトナム少年の銃殺死を見物しなければ、人間の死や平和と戦争の同在性の意味を確認できなかったとき、幻

想を透視する作家ではなくただ眼の前でみえるものしかみえない記者の眼しかもたない第三者にはかならないのだ。[吉本 1965: 88]

という箇所だろう。

吉本にとっては、日本が平和であっても、そこに国家権力との、武力をとまなうものだけにとどまらないさまざまな形の戦いがある、ということだ。日本にあっても、戦う人びとや、倒れていった死者がいる。一見平和な世界であっても、平和と戦争はつねに存在し、その間で生きざるを得ない世界に生きているということになろう。

吉本が「幻想（思想）を透視する」ものが作家と定義するとき、『ベトナム戦記』はこの定義の上での作家が書いたものではない、ということになるのだ。そのような中で、開高が日本国内に発言しながら倒れていった人びとや、無言のまま生き、死んでゆく人びとがいることを「見ず」ベトナムを取材したのだ、と批判したのだった。

しかし、ベトナムで処刑された青年と同じように、日本で倒れていった人びとを、〈銃殺〉された「死者」と〈見る〉ことができるだろうか。たとえば国家権力と戦い斃れていった人びとは、権力と戦うことを選択できた。また、〈平穏〉な日常で無言のまま死んでゆく人びとは、無言でいることを選択できた。つまり日本国内の人びとにとって、闘争、発言の選択の余地があった、といえるのではないか。

吉本にとっては、戦後20年が経過した日本であっても、戦争と平和は同在していることから、日本で生きる人びとにも選択肢はないということになろう。開高は戦争と平和が同在していることに気づいていないことになる。しか

し、開高は吉本のようには見えていなかった。のちの小説『輝ける闇』において、「東京はアジアであるかどうか怪しまれる。一中略一政府か反政府か、二つに一つしか立場がないのがアジアだとすると、第三、第四、第五の立場が無限にある東京はふたたび怪しまれる。」[開高 1968: 178] という。無数に選択肢のある日本と、選択肢が二者択一であるベトナムということだろう。

『輝ける闇』は1968年に執筆された小説であり、またルポルタージュと創作というちがいがあある。よって開高の考えがそのまま『輝ける闇』に反映されているとはいいいきれない。しかし開高にとって、ベトナムの人びとの選択肢とは、生きるか死ぬか、殺すか殺されるか、そう見ていたともいえるだろう。選択可能な日本から取材におとずれた開高は、ベトナムの人びとは白か黒かという二者択一に迫られていると考えたのだった。

ベトナムの人びとと同じ要素を、日本国内の人びとに対して見出そうとする吉本の立場と、開高の立場とのちがいがあったことは指摘できるだろう。このちがいが吉本のいう第二者、第三者という批判を生み出したのだが、第三者である、という開高の立場であっても、第三者としてベトナム戦争を「見た」ことに意義はあるのではないか。

では開高がベトナムで「見る」という行為そのものに関して、どういった議論があったのだろうか。この「見る」ことについて問題を指摘したのが、1966年の三島由紀夫と安部公房の対談である。三島は『ベトナム戦記』におけるサイゴンでの処刑について、「なんにも見ていない。僕は驚いた。それは、こっちで、東京にい

て書斎のなかで、想像して書いたほうがましだよ。」[三島 1966: 242] という。

三島はこの発言の前に、「行動というのは、一瞬一瞬の的確な判断で要らないものを捨て、要るものを取り、そうしてどんどん選択しながら進んで行くのが、生きていること。」[三島 1966: 242] とする。また言葉が有効性をもつためには行動と同じ原則で動かなければならないとし、「見る」ことも行動のひとつであるという[三島 1966: 241-242]。そして開高が「見る」ことを信じていないとし、「これはもう、非常に衰弱だと思うよ。やはり作家というものは見なければならぬ」[三島 1966: 242] と批判する。

三島の指摘では、「見る」ことが行動のひとつで、行動と言葉がおなじ原則で動くのであれば、「見たもの」、が言葉にならないといけないということになろう。したがって言葉になっていないことは、ベトナムを見ていないことになる。開高が見たベトナム戦争が三島にとっては「見ていない」、つまり「書かれていない」のであれば、彼らにとっては『ベトナム戦記』における処刑の描写は、現場を見た、記者ではなく作家が書いた作品として認めることができないことになる。

はじめにふれたように、『ベトナム戦記』は短期間で執筆され、開高自身が完成度に満足できなかったものであった。ここからも三島の「見ていない」が「書かれていない」、という指摘はある意味において当然だろう。

終戦を20歳前後でむかえた三島や安部にとっても、創作の題材としての「戦争」は、14歳で終戦をむかえた開高より体験としては深淵ともいえるだろう。しかし1965年という終戦後20年

をむかえた時代にあって、他国の戦争とはいえ、開高が見たもの、見たことが「戦争」だったことの意義はこの対談では問われない。

「私」が《絶対の悪》という、広場の空気をきわめて限定的にとらえる言葉を選択したことは確かに、第三者としての立場の脆弱さも指摘できるだろう。あいまいな言葉ではなく、「絶対」の「悪」といいきってしまうことによって、処刑そのもののみならず、「私」の立場をも限定することになる。現場を見ながらも当事者のようにはなれないという、開高の現実的な視点は評価できても、現場を見ていない人びとは、当事者でなければベトナムを思考しえない、ともいえてしまう。

日本から取材におとずれた開高は、かつてのアジア・太平洋戦争の加害国の記者でもあると同時に、高度経済成長の只中に、先進国から途上国を訪れる非当事者でもある。しかし、『ベトナム戦記』では戦争を「直接現場で見る」ことそのものに重点が置かれている。それゆえに、日本とベトナムといった作者の出自、国籍、国境を出発点として問題を提起する作品とはなっていないのではないか。開高の視点が異なることから、ここでも吉本との問題意識との相違がみられる。

先掲論文における矢崎の指摘のように、見ることによって当事者性を獲得できるのであれば、ベトナム戦争は、当事国にいない数多くの人びととの問題ともなりうる。しかし開高は、第三者だと宣言してベトナムを見つつ、報告する。第三者としての立場は「選択可能」であり、「目撃者にすぎず、特権者」[開高 1965-b: 145]ですらある立場なのかもしれない。ただ、ベトナムでの開高の体験は、日本人にとってのベト

ナム戦争という角度からの批判からは逃れられないものの、現場を「見た」開高自身にとってのベトナム体験でもある。

吉本の批判は、作家は思想を透視するものであるが、開高はそれができていないというものであった。また三島は「見る」という、「行動」と同じ原則で言葉が動くにも関わらず、それが言葉として表現されていないという批判であった。処刑の目撃によって、開高は第三者という意識を明確にしつつ、なおかつ圧倒されたことは前章で触れたとおりである。

それでは、圧倒的、衝撃的な現場での体験が、開高の言葉にすることそのものに影響を与えたがゆえに、作品としては十分に描くことができなかったと考えられないだろうか。このことをさらに考察するために、次章では開高と同時期にベトナムを取材した日野啓三の「ベトナム体験」を検討していく。

3 日野啓三による『ベトナム戦記』評と『ベトナム報道』

同時期にサイゴン特派員であった日野啓三は、1990年刊行の『ベトナム戦記』文庫版の「解説」において、この作品を以下のように評価する。

明確な構図のない大状況の混沌^{カオス}の中で、事実らしきものを追ひ、最小の筋道でも読みとり浮かびあがらせたい、とする報道者としての誠実さが、言葉の、文章の全性能を不可避的に呼び出すのである。(傍点引用者) [日野 1990: 296]

混沌とした現場に立ち向かうとき、それを伝える者の言葉は報道的な言葉、あるいは文学的な言葉という区切りがなくなる、ということだ

ろう。日野は、「それまでの新聞記者的、評論家的文章が自分の中でぼろぼろに崩れ、一種の失語症的状态」[日野 1990: 297]になったという。日野は公開処刑の現場に立会った記者の一人でもあるが、処刑後、何度もその場をおとずれ眺めていたとき、自分では意識しない言葉が浮かび出してきたとし、それは「いわば無意識の言葉、文学的文章の発生である。」[日野 1990: 297] とする。

また日野に限らず開高もベトナムで、言葉とは何かを問うたのではないかという[日野 1990: 297]。そして、「できる限りのナマの事実と筋道に迫ろうとするわれわれ自身の気魄と姿勢であるだろう。そしてそのための技術的努力、文章であれば言葉とのぎりぎりの格闘の軌跡だ。」[日野 1990: 298-299] としている。

これは、一見すると報道する者が、歴史的事実として過去のものを見ると、その当時伝えられた事実を重視しない、とも受けとめられてしまうものだろう。だが、日野は言葉そのものに重点をおく。ルポルタージュと文学、あるいはジャーナリズムと文学という区分そのものが解体の危機にさらされる。そのときに生み出される言葉によって、現場の記者や特派員の姿勢を読みとることこそがルポルタージュの魅力だ、ということだ。

ベトナム戦争の取材で、日野の報道の言葉、評論家的文章は解体し、文学的文章が生まれた。そのような状態から日野は、報道、文学の言葉を試行錯誤の上に検証しようとする状態をベトナムで経験したといえる。川村湊は、日野、そして開高のベトナムでの一連の取材経験を「矛盾したものがぶつかり合い、衝突することによって、核融合のような巨大なエネルギー

が出る。そんな巨大な言語実験」[川村 2013: 324] と評する。日野の『ベトナム戦記』の解説は、こうした検証作業をする開高の姿そのものを読むことができる作品と評価したといえるだろう。

では日野自身はベトナム戦争をどう捉えていたか。日野のベトナム取材が日野の言葉、表現にどのような影響を与えたかは、1966年に発表された『ベトナム報道 特派員の証言』でより明確に記述されている。日野は韓国、軍縮、東欧の問題の専門家であったが、「ベトナムは多くの専門外の領域」[日野 1966: 22] であったという。しかし、ベトナムを「未知の動乱の只中、台風の眼の中心」[日野 1966: 24] とし、それを見きわめる決心をしてベトナムへ行った。

アメリカの援助を受けながらも、自尊心の強いベトナムの人びとを、「物理的には弱くても内心の誇りだけは高いのだ。それはイデオロギーより根深いもの」[日野 1966: 137] としてとらえる。また、「たとえナパーム弾はジャングルを焼きつくすことはできても、ベトナム人たちの心を焼きつくすことはできない」[日野 1966: 215] という。自由主義や共産主義といったイデオロギーによってはとらえられないものがベトナムの人びとと戦争であったということになる。

山根繁樹は、人間とは「言語について鋭く認識しつつも、いわゆる「日常」を生きるものであり、日野にとってはその日常が「新聞記者」であったということなのである」[山根 2012: 213] と指摘する。ベトナムの人びとと、記者としての日野の日常とは異なるということになる。日野が非日常とした、もはや日常とは感じ

られなかったその「日常」が、ベトナムの人びとの日常として、日野の眼前に展開されていた。記者として伝える「言葉」を越えて、それでもなお、「徹底的にリアルに「伝達」しようとする」[山根 2012: 214] 日野の立場があった。

山根はまた、「自らの責任において直接の取材と報道を行ったのであり、その試行錯誤についての自覚なしに、『報道論』などありえようはずも」[山根 2012: 206] なかったと指摘する。このような日野の姿勢は、日野自ら「“二代目”サイゴン特派員」[日野 1966: 30] と称するように、外国通信社の情報をうのみにせず、現地のメディアを選別し、かつ米軍のブリーフィングには自ら赴き質問するという方法を探らせたのだろう。当時の日本の置かれた国際的な状況、またアジアにおいては先進国になりつつあった日本の記者として、新しい時代の新しい戦争の形としてベトナム戦争をとらえようとしたといえる。

先に述べた「未知の動乱」の現場を取材するという日野の立場は、ベトナム取材に際しての姿勢や、取材方法を模索することにつながっていく。日野の表現では「云いがたい何か」[日野 1966: 62] というものであった。それは出所の分からないうわさや、言葉にならない感情といったものから構成された、日野自身のベトナム情勢の認識でもあった。ベトナムで得た、そのような「云いがたい何か」に対して日野は以下のように述べる。

分析よりまず共感が、論理より予感が、数少ない公認の事実より一見あやしげな情報の積み重なりが、奇妙なりアリティーをかもし出すのである。
[日野 1966: 62-63]

この「奇妙なりアリティー」を感じたとき、一見信頼するに足らぬ情報から、報道するに値する事実が明らかになることもある、ということであろう。岩間優希は日野の姿勢について、“自分のこの目で戦争を見る”という強い思いが書かれているとし、日野の態度について、簡単なことではないが、「表面的な「事実」をそのまま伝えることで特定の立場に加担してしまう居心地の悪さを発見したことが、日野をしてこのようなヴェトナム報道論を書かしめた」[岩間 2012: 461] と指摘する。当時のベトナムの置かれた状況では、どのような要素であっても情勢の変化の材料になり得た。日野はそれらの断片に目を背けることなく「情報」のひとつとして扱おうとしたのだった。

日野の場合、これらの姿勢があり、云いがたい何か、不定形な情報の断片があり、それを作り出しているのは他ならぬベトナムの人びとであった。動乱の世界に立ち会うという意識を強く自覚し、それによって、日野自身もその世界の一人として言葉を生み出していったといえる。『ベトナム戦記』の解説で、日野は評論家的言葉から文学的言葉への移行をベトナムにおいて強いられることになったことは先述した。言葉や認識にたいする変化が、のちの作品に繋がっていったともいえる。それでは「悪夢の彼方」ではどのような「言葉」が日野によって生み出されたのだろうか。

4 処刑という“儀式” — 「いやらし」さ⁽⁶⁾ — 日野 —

「悪夢の彼方」において日野はサイゴンの公開銃殺を見たことについて、一斉射撃の音も、隊長が止めの一発を撃ち抜いたことも、少年か

ら流れ出た血だまりも心の底にこたえなかったという。それらは「末梢神経的には強烈な衝撃だったが、同時に恐らくこの機会を逃しては二度とこういうものは見られまいという好奇心と、一般の人は滅多に見られないものをこんな間近に見られるという特権意識との満足感が、ある程度そのショックを中和していたように思う」[日野 1984: 44] という。

一般の人とは、戦争状態にない国に住む、おそらく記者という職業を離れた日野自身もその一員となる、非当事国に住む人も含めた人びとのことだろう。日野は自らの「特権的」な立場を感じているが、ベトナムの人びとは日常的に凄惨の現場を目撃している。日野の第三者としてのあやうい立場が明らかになる。当事国の人びとにとっては、戦争が日常であり、凄惨な現場と、それを離れた何事もない日常がある。だがこの思考も、戦争当事国の人びとには縁遠いものかもしれない。前章で検討したように、第三者が日常、非日常と分けることのできるものすべてがベトナムにあったのだろう。

日野はまた、処刑が行なわれる広場の警戒にあたっている兵士、警官、銃殺隊よりも、処刑の準備をする黒衣の男たちの無表情が印象に残ったとし、「裸足の男たちだけが、妙に人間的な感じを与えた」[日野 1984: 45] という。こうした「非人間的な儀式めいた空気に包まれて」[日野 1984: 45] いる風景は、日野には「耐えがたくいやらしかったのだ。“いやらしい”という皮膚感覚的な言葉だけが繰り返しこみあげてきた」[日野 1984: 45] と感じさせたのだった。

ここで日野は“いやらしい”という言葉について詳述している。「実際の戦争の場では、悲

惨とか残酷とか非情とか陰惨とかめっちゃくちゃとか話にならないとかその他あらゆる形容が可能だが“いやらしい”という形容詞だけは思いつかないだろう。」[日野 1984: 45] という。処刑という“儀式”について、

真に非人間的に儀式的なもの、暗くぞっとする様式的なもの、犯しがたく原理的なもの、眼には見えないが私たちの歴史を根底で支えつづけてきたある絶対的な仕組みだと私は感じた。[日野 1984: 46]

と述べる。戦争を表現する際には使われない、あいまいだが特異な言語表現であえて表現することで、日野の皮膚感覚ともいえる、処刑の現場を書いたのだった。日野はさらに人間の歴史、現代の世界についても考察をつづけ、

石に歴史はない。獣にも歴史はない。人間だけが歴史をもっているということのために支払ってきた、そして現に支払いつつもあるものは何であろうか。それは人間の血であり恐怖である。人柱の上に塔が建てられたように、人間の血を支点として歴史は支えられていることを、私は見た。[日野 1984: 47]

日野はサイゴンで特派員としての仕事に励むが、「東京ではいつも自分は一番大切なことを考えぬくの避けてきた。だがいまここで、自分は何か非情に大切なこととじかに向きあっている」[日野 1984: 48] と思ったという。戦闘、テロの死者たちが安置される死体処理場の前には残された人びとが泣きつづける。そこにあるのは「本ものの絶望のにおい」[日野 1984: 49] だが、「線香のにおいと漂う死体の腐臭の中で、私は嘔気似た嫌悪と感動をおぼえつづけた。」[日野 1984: 50] という。

残された人びとの姿を見る日野にとっては、ベトナムの人びとの生きる姿そのものが、儀式的に見えた処刑と対峙するものとして写ったといえる。「歴史の地平を乱し、私をむき出しの世界の地肌へと押しや」[日野 1984: 48] られた日野は、「世界の実質を形づくるものはもっと混沌と無意味でむなしく荒涼たる何ものか」[日野 1984: 50] だという結論をえる。

ベトナムに来るまでの体験や事前の知識などではとうてい表現しえないものを、開高と同様ベトナムで「見た」日野の衝撃の重さを読みとることができるだろう。ゆえに、戦争を表現するためには使われることがないであろう言葉として、広場が「いやらしい」と形容したのだった。処刑の現場を表すにあたり、開高の言葉では《絶対の悪》となり、日野の言葉では「いやらしさ」となった。

5 開高の従軍取材と、その体験の重さ

1965年2月14日、開高は南ベトナム政府軍と米軍の支援による作戦に従軍取材し、解放戦線からの銃撃を受けた。取材の前、鉄兜を貸された開高は米軍の少佐に銃撃にどれほどの効果があるかを尋ねるが、右から左へ銃弾が貫通するかのようなジェスチャーをされた。そこで第二次大戦時に機銃掃射を受けたときの記憶がよみがえり、「二十年前に味わった恐怖を鮮やかに私の皮膚によみがえらせた。私の頭蓋骨は豆腐よりもろく、やわらかいらしいのである。一個の二センチ半ぐらいの鉄片が一瞬に粉碎してしまう。」[開高 1965-b: 193] と考える。

このことは作戦取材中に銃撃を初めてうけたときにもよみがえり、「(……豆腐だ、豆腐だ、豆腐なのだ!)」[開高 1965-b: 211] と感じた

という。いかに警戒、警備されようとも、ひとたび戦場に立たされれば、あっけなく落命してしまうことが開高をおびやかした。

開高は非戦闘員であったが、銃撃を受けたあと、重傷を負った南ベトナム政府軍の負傷兵をこう書きとめている。

呻めきもしなければ、悶えもせず、ぼんやりと自分の傷口を見おろしていた。まるで神経がないみたいなのだ。一中略一誰一人として呻めくものもなく、悶えるものもなかった。血の池のなかで彼等はたったり、しゃがんだりし、ただびっくりしたようにまじまじと眼をみはって木や空を眺めていた。そしてひっそりと死んだ。ピンに刺されたイナゴのようにひっそりと死んでいった。いまたっていたのがふとしゃがんだと思ったら、いつのまにか死んでいるのだった。[開高 1965-b: 214]

無言のまま死んでゆく兵たちを、開高は「いたい彼等の内部の何者がこれほど異様にして強力な自制力を発揮させるのか、いまだに私にはわからない」[開高 1965-b: 214] という。それはベトナムが仏教国であるゆえなのか、アジア特有のものなのかと考えるが、結論は分からないいまだとする。「傷と死に対してのみ政府軍兵士が聖者になるのは何故だろうか?……」[開高 1965-b: 215] とまで感じたという。

日野は「悪夢の彼方」で、「戦闘には作戦とか戦術とか勇気とか恐怖とか勝敗とか接触とか後退とか回避とか、そうした殺人という事実以外のさまざまな要素がまじっているからだ。何よりも不確定の偶然性がある。」[日野 1984: 45] としている。日野は戦場で取材することがなかったが、不確定なもの、偶然性が多数ある場を指摘している。

開高は従軍取材において、理解できなかった

ものとしてベトナム政府軍兵の姿をあげている。「イナゴのように」「いつのまにか」「ひっそりと」死んでいく人びとの姿を、戦闘員でありながらも無力という、一見矛盾するような立場にある兵たちの死を描いたのだった。

ベトナムへ行く前の開高が経験した戦争は、機銃掃射、勤労働員といったものであった。終戦当時14歳だった開高が戦場を目撃することは当然なかった。従軍取材の最初の部分で、サイゴンに帰るかどうかを迷っている開高の心理描写があることから分かるように、生命を脅かされる戦場は、開高にとっては文字通り未知の体験であった。戦闘、戦場という不確定な要素が複雑に交差する現場にあって、即座に理解し、言葉にすることができないものを見たのだった。しかし開高にとってはベトナム戦争は他国の戦争であったが、彼自身の体験として戦場で「見たもの」を言葉にすることになる。

『ベトナム戦記』では、作戦に従軍する経緯についてはあまり書かれないが、従軍したあとの開高の心理についてはある程度たどることはできる。処刑の目撃は第三者の目で見る、被害と加害を外部から見ていることから、見る体験そのものが問われる。しかし戦場での体験は、第三者ではいられず、被害と加害を内部から見て、「被害」のみを体験したといえる。双方を目撃、経験した開高は、当事者とはいえず、吉本がいう「第三者」ともいえず、目撃、経験をしていない完全な第三者ともいえない立場となる。

処刑の目撃で、開高自身が「見たこと」そのものにたいする当事者意識を得たことは第2章で考察した。戦場の目撃はそれをさらに一歩進めたものともいえる。戦場の体験は「私」とい

う人物の体験となるだろう。ベトナムでの体験はより開高の「個人的な体験」となる。つまり、「開高にとっての戦争」、のちの小説『輝ける闇』で書かれた「私のための戦争」⁽⁷⁾の布石ともいえるだろう。

従軍の章は、戦闘の取材からの帰途、政府軍の砲兵隊将校が、「I am very sorry.”(たいへんすみません) —中略—将校はぼつりと、ひとこと“My country is war”(私の国、戦争です)〔開高 1965: 221〕とつぶやいたところで終わる。非当事国の特派員に当事国の、被害者でもあり加害者ともなりえる兵士が謝罪するのは奇妙ともいえる。だがこの一文を日野は「解説」において、人間のいじらしさを感じ、自身が好きなところだという〔日野 1990: 299-300〕。そこには無言のまま死にゆく人びとと、それを目撃することしかできず、しかし死に直面せざるをえないという開高の微妙な立場が描かれる。加えて、戦場を「見る」開高と、兵士によって「見られる」開高が描かれている。

従軍取材を経て開高は、「見る」だけでなく、現場を「見た」ことによって、他国の戦争で戦闘を目撃した特派員、作家として「見られる」こととなった。創作の題材を得るためといえは過酷な体験であったが、日本国内で書斎にいただけでは「無関心な第三者」のままであったかもしれない。戦闘の目撃と生還は、戦後に育った作家の中でも得意な体験といえることができる。これまでの考察から、処刑、戦闘の目撃は、ベトナム以前の開高の言葉では表現できないものであるということになる。第2章で述べたように、幻想、つまり思想の背後にあるものを透視するのが作家である、と吉本は定義した。事実を伝えるだけでは足りない何か、日野の言葉

では「言いたい何か」だが、文学という形式では言葉で表現しなければならない。開高が「見た」戦争の言語化という、肉体的、精神的両面の葛藤は帰国後もつづくことになったのである。

おわりに

北ベトナムを取材した記者の一人、ウィルフレッド・バーチェットらへの批判は『ベトナム戦記』にもあるが⁽⁸⁾、『週刊朝日』よりは穏当なものとなっている。本稿では引用しないが、バーチェットらにたいする批判⁽⁹⁾は、思想、信条、理念が先にあり、机上で言葉を書く知識人たちへの批判となっている。見ることそのものの意義にそれほど重きを置かず、言葉にされたもののみによって判断する人びとに対する批判だった。

それはまた、日本国内にいる、多くの知識人たちへの批判でもあろう。ただ、「見る」行為をしながら「見たもの」を描くことに苦心していることは読めるのだが、それを作品として十分に表すことができなかったという開高にたいする三島の批判は的確でもある。

しかし、「ベトコン兵士を慈悲深い、敵味方の区別ない普遍的ヒューマニストだと考えてもらっては困る。彼らは“戦争”をしているのだ。」[開高 1965-b: 233] と開高はいう。思想という観点からは解放戦線は英雄にもなり、あるいは殺人鬼にもなるのだが、いったん戦争状態になると、巻き込まれた人びとは英雄と殺人鬼とにかかわらず、手段を選択することなく戦争遂行のために行動してしまう。「食べるものがない農民に“自由”とはいったい何のことか、理解のしようがない。」[開高 1965-b: 235]

という言葉にも現れているように、戦争状態における思想や理念を表す言葉が、日々を生きていくのに必死な多くの人びとにとっては無意味だ、と開高は書いたのだった。こうした多くの人びと、あるいは膨大な死者の死の経緯を饒舌に、ジャーナリズムを離れた言葉で描いたことが、『ベトナム戦記』を読み解く鍵となるだろう。

加えて理念、観念的な、自由や平和といった、ひとつの短い言葉に集約するのではなく、斃れてゆく死者たちの姿を詳細に描こうとした。これは政治的、思想的なスローガンのような言葉で一括りにされないものであろう。それは日野が『ベトナム報道』において述べたように、断片的な「言いたい何か」を、決して一言で集約することなく作品として表したといえよう。

吉本は開高を、戦争と平和が同在していると認識した上で批判した。思想上の立場を問わず知識人や作家がベトナム戦争を批評したが、多くは戦争を現場で「見る」ことはなかった。開高は1987年のインタビューで、ベトナム戦争についてあらゆる場所に出向き、話したが、「誰一人感じている奴がいない。そのことに気が付いたんですぐに止めちゃった。」[開高 2005: 48] という。

この発言は、戦争を「現場で」見ない者は、戦争について感じることもできない、といっているようでもある。しかし直後に、「それで、自分は文字しか相手にできない。文字をいじるしかない、文字を組み立てることで訴えるしかないというので、夜中に書き始めるというのが、最初の衝動なんですけどね。結局、文学が残ったということなんです。本当に通じなかったなあ。」[開高 2005: 48] と続けている。

『ベトナム戦記』では、「文学が残る」直前の、開高の姿を知ることができ、また、文学的言葉の試みの場として「悪夢の彼方」には日野の作家としての歩みの第一歩を読みとることができるといえる。こうした二人の試み、特に開高の試みは、吉本や三島にとっては初心なものとうつつたのだろう。言語化できていないものは見ていないことと同じであり、そこに文学はない、ということにもなる。

だが開高や日野は、特権的、ジャーナリズムの依頼からの取材であっても、他国の戦争において「見る」、さらにいえば「見てしまった」のだった。「見る」ことと、それに関わる試行錯誤、川村の言葉では「言語実験」の機会を得た作家として、開高と日野を位置づけることができるだろう。

〔投稿受理日2016.4.23／掲載決定日2016.6.1〕

注

- (1) 開高の経歴については、和泉書院刊の浦西和彦(1990)『開高健書誌』を参照した。
- (2) 「日野記者サイゴンへ」1964年12月3日「読売新聞」夕刊、1頁
- (3) 「日野特派員帰社」1965年6月29日「読売新聞」朝刊、1頁
- (4) ジャーナリズムからの研究については、たとえば宮畑譲(2006)「開高健『ベトナム戦記』ナラティブ・ジャーナリズムからの再評価」『新聞学 文化とコミュニケーション』第21号(同志社大学大学院新聞学研究会刊)などの試みがある。
- (5) 開高健 1965-b, 144頁
- (6) 日野啓三 1984, 45頁
- (7) 開高健 1968, 227頁
- (8) 開高健 1965-b, 164頁
- (9) 開高健 1965-a, 25頁

参考文献

岩間優希(2012)「新刊旧刊 日野啓三と『ベトナム報道』」『アリーナ』第13号、中部大学

- 浦西和彦(1990)『開高健書誌』和泉書院
- 開高健(1965-a)「クーデターは月例行事となってもずばり海外版」『週刊朝日』第70巻10号
- 開高健(1965-b)『ベトナム戦記』朝日新聞社
- 開高健(1968)『輝ける闇』新潮社
- 開高健(1974)「頁の背後」『開高健全作品 エッセイ3』新潮社
- 開高健(2005)「未発表インタビュー『耳の物語』、創作術、ベトナムについて語る」『PLAYBOY [日本語版]』第31巻8号、集英社
- 川村湊(2013)「解説」(日野啓三(2013)『地下へサイゴンの老人 ベトナム全短篇集』講談社文芸文庫所収)
- 日野啓三(1966)『ベトナム報道 特派員の証言』いるか叢書3、現代ジャーナリズム出版会
- 日野啓三(1984)「悪夢の彼方に」『名づけられぬものの岸辺にて 日野啓三主要全評論』出帆新社
- 日野啓三(1990)「解説」(開高健(1990)『ベトナム戦記』朝日新聞社刊所収)
- 丸川哲史(2010)「記録する眼——開高健にとっての中国／ベトナム体験」『文藝別冊 開高健』河出書房新社
- 三島由紀夫(1966)「二十世紀の文学」『文芸』第5巻2号、河出書房新社
- 矢崎彰(2002)「開高健とヴェトナム戦争——文学作品に描かれた戦争——」『年報・日本現代史第8号 戦後日本の民衆意識と知識人』現代史料出版
- 山根繁樹(2012)「日野啓三『ベトナム報道』における言語観——小説の言葉とは何か——」『国語教育論叢』第21号
- 吉本隆明(1965)「戦後思想の荒廃——二十年目の思想情況——」『展望』第82号、筑摩書房